市街地における横断地下道の通行者意識の一考察

五洋設計株式会社　企画課　正会員　新山　富雄

まえがき

土木構造物の中で一般的に最も数多く人と物とが接する施設として、歩道橋および横断地下道がある。今日これらの施設は、主に昭和４１年の交通安全施設等整備事業で全国的に設置されたが、その利用性は誠に悪く通行者の不評をかっている。そこで、このたび横断地下道の調査を得る機会を与えられたので改善への意図を探ることとした。

調査目的

従来より横断地下道が我々に与えるイメージと、その利用性は必ずしも良い評価が得られているとはいいがたい。そこで、現在比較的通行者の多い４３号の地下道について意識調査を行い今後のより良い環境空間を創造する地下道設計のための参考資料とするものである。

調査方法

この調査は、現在の地下道利用者の利用形態（地下道の形式、周辺環境、利用者数等）を把握しその機能特性をつかもうとするものである。次に、意識調査は回答者の生の意見が得られるような質問内容とする。

また、改善案については事前に作成した３案程度のサンプルの中から選んでもらう。なお、アンケート調査はインタビュー方式により行なった。

調査内容

1) 期　　間 ---- 平日の１２時間について３日間実施する。
2) 調査位置 ---- 階段の出入口および構内
3) アンケート項目
「現在の地下道をどのように感じていますか」
「改善されるとしたら何を要望されますか」
「壁、上屋のデザインとしてどれが良いと思われますか」等

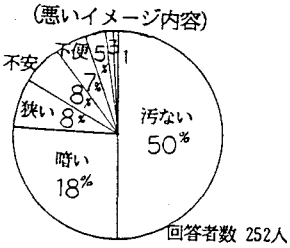
現在の横断地下道の状況

図－１

調査経過

１日の通行者は約１万人を越えそのうち約６～７割が朝、夕のラッシュ時である。また、ピーク時の通行者密度は４７人／分であっるが昼間は比較的閑散とした通行状態といえる。

以上の状況下で、通行者の意識調査を行なった結果を右の図に示す。全調査人数（２８８人）のアンケート調査から分析すると約９割の人が何等かの悪いイメージを持っている。そのうち「汚ない」「暗い」が図－１に示すように全体の７割をしめている。そこでこの悪いイメージを与えている感覚要因を図－２に示すように視覚的な心理を要する内的要因と機能的な心理を要する外的要因とに分けて比較すると、前者の内的要因によるものが８割をしめている。この結果から考えられることは利用者の意識と

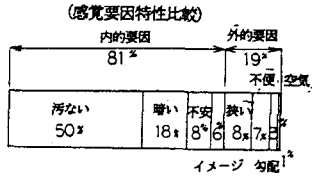


Tomio　NIIYAMA

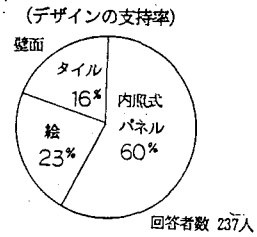
しては利便性よりも、その環境が与える心理的な作用が大であるといえる。なお、男女の感覚要因の違いとして女性は視覚的情緒感が敏感である。それに対して男性は機能的感覚を強調している。このことは利用層により環境のイメージつくりが必要と考えられる。

次に、壁面と出入口部の改善案について選定してもらった結果図－３のように壁面は内照式が多く、図－４のように出入口部の屋根のデザインは円型式を多くの人が希望している。その理由としては「汚ない」「暗い」という悪いイメージを取り除き、「清潔で明るい空間」を殆どの人が望んでいる結果である。また、単純で固い感じのする現在の屋根よりも「やわらかな明るい」イメージを与える円形の半透明式を望んでいると思われる。

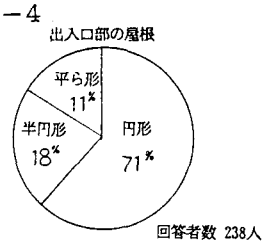
図－２



図－３



図－４



調査結果

今回の通行者意識調査で得られたことは、

1)横断地下道に対する悪いイメージの要因は数多くあるが、その殆どが環境による感覚要因である。

2)利用者の性別および年代に共通した感覚特性がうかがえる。

3)改善方法の要望に共通したデザインが多い。

結　　論

今後この種の改良および新しい横断地下道を計画されるにあたって利用者に快適なイメージを得てもらうには、1)構内および階段部の照明の基準を出入口部と同様１００ルクス以上とし、壁、床、天井の色彩および材料と調和させ寄り一層の演出効果を上げる。2)壁面およびゲートのデザインは、地下道の設置される立地条件および利用者層の特性により共通した型式と調和のあるデザインの選定が設計手法としてとりいれられることを望むものである。

あとがき

人と物とが触れる関係は重要な生活環境の創造であり、地下道も今後利用者と施設のありかたを問う一つの接点であろう。これを機会に各方面で議論、検討され、一つでも利用者に親しまれる横断地下道が生まれれば幸いです。

参考文献

1.親しみと快適な空間づくりのための地下道の提案　(五洋設計株式会社社内技報より)

2.現代基礎心理学　(東京大学出版会)

3.道路交通管理の技術的基礎知識　(警察庁交通局)